

第73歩

「森と炭素の道」

この度、高松市が脱炭素先行地域に選定されました。その柱の一つが、早明浦（さめうら）ダムを擁する水源地・高知県嶺北（れいほく）地域と、利水地である高松市が連携し、森林由来のJ-クレジットを創出・活用して市内の脱炭素化を進める取り組みです。サンポート高松エリアをはじめとする市内の事業者が、このクレジットを活用して排出量の削減や相殺（オフセット）を図る仕組みは、都市の経済活動と山の森づくりを一本の線で結び直します。

私たちは半世紀以上にわたり、香川用水がもたらす「水の恩恵」を受けてきました。50年前に完成した香川用水は、渇水の不安を抱えてきた香川の暮らしと産業を支え、同時に県境を越えた信頼と協力関係を育んできました。今回の連携は、その「水で結ばれた関係」に、新たに「森と炭素という新しい価値」を付加する試みだと言えます。

森林由来のJ-クレジットは、適切な森林整備によって吸収・固定されたCO₂の価値を「見える化」し、必要とする側が費用として支えることで、森に再投資の資金を回す仕組みです。嶺北の森が健全に保たれれば、CO₂の吸収だけでなく、水源涵養（かんよう）や土砂災害リスクの低減にもつながります。一方、高松の事業者にとっては、地縁のある水源地の取り組みに参加しながら、脱炭素の取り組みを具体的に前へ進めることができます。

この事業の母体となる「もりとみず基金」の役割も重要です。水を受け取る側が、水を育む森の価値に対して継続的に関わり、支える。基金はその意思を制度として形にして、行政や企業、地域をつなぐ「器（うつわ）」になります。短期の寄付で終わらせず、森の手入れ、人材、計測・認証といった地道な工程を支える「器」があつてこそ、クレジットは信頼され、循環が生まれます。

香川用水が「水の道」だとすれば、今回の取り組みは「森と炭素の道」です。水源地と都市が互いの課題を共有し、価値を交換しながら未来をつくる。県境を越えた協力の好事例として、高松の脱炭素が嶺北の森を元気にし、その森がまた高松の暮らしを支える。そんな循環型システムを着実に育てていきたいと思えます。

